英文法拾遺Ⅳ

伊　藤　　清

(7) 関係代名詞(前)

訂正問題あるいはその変形とも言える選択問題が入試に屢々出される。受験生の学力を見る点では有効な手段であるが，誤った問題が時に見うけられる。

I won't be able to attend the meeting next week.

これは英文法の正誤問題に関する問題集に引用せられた，ある大学の入試問題の1つであるが，shan't を答とし，won't を米語用法と説明して，解答のヒントでは「入試英語ではイギリス式に従う方が無難であることを示す1例である」と言う。入試英語という言葉も変であるが，合格の為には長いものに巻かれろ式のヒントである。しかしこれも受験生に対する思いやりであろう，合格しなければ何にもならないのであるから。

訂正問題，また1つのみを答とすべき選択問題として提出すべきものは，文語，口語，英語，米語の孰れに於ても，また1つ以外はすべて，用いられないものに限定すべきであるのに，米語も口語も無視して，英語の文章体のみに限って正解として出題するのであれば受験生にとっては迷惑どころではすまないであろう。

ある大学の入試の選択問題の中の1つに，4つの選択肢の中から正しいもの1つを選ぶことを求めている問題がある。採点者は after を正解としたのであろうか，for を正解としたのであろうか。

He was named (after, for, in, on) his grandfather.

またある大学の入試では次の文を訂正問題に出している。

I am told that he has once gone to America.

have gone の形で経験を表すことは英語に於ても，特に米語に於てよく見られる用法であり，殊に once を使用している以上 has once gone が経験を表わしていることは明白である。

She *had once gone* with some one to ask his advice. —Virginia Woolf : *Mrs. Dalloway*（彼女はかつて彼の診察を受けるために人に付いて行ってもらったことがあった）

診察のついでに，to see the doctor の意味で to go to the doctor's は 's のある方が普通であるが，*to go to the dentist* を誤りとする出題もある。

It is easy to count the times he had been off—once, *to go to the dentist*, and two or three times to go home when Beryl was ill. —Theodore Dreiser : *The Shadow*（彼が出かけた回数を数えるのは簡単である—1回は歯医者へ，そして2，3回は妻のベリルが病気の時に家に帰った）

英語にも Jan Struther の *Mrs. Miniver* に同句が使用されている。

口語用法についても，これを正しい英語ではないと考えているらしい問題が出される。Somerset Maugham の劇中人物は between you and *me*—*For Services Rendered* と並んで，between you and *I* (and the gatepost) —*The Bread-winner* を教養ある人物が喋っている。*me* が好ましいとしても *I* を誤りとして訂正する必要があるであろうか。教養ある英米人は *I* を一切使わないのであろうか。

He isn't interested in art and literature *like* I am.—Maugham : *The Bread-winner*（彼は私ほどには芸術や文学に関心がない）

like は educated people も用いる good English であり，owing to の類推で用

いられる due to もそうである。これを正そう(?)とすることは狂瀾を既倒に廻らすの類であろう。中学，高校の英語の教科書が次第に米語中心に移り，文語と口語との隔たりが縮まりつつある現在，米語用法，口語用法を大学入試で認めないのであれば，最初からその旨を受験生に知らせておくべきであろう。

また問題として不完全なものもある。fly の意味を与えないで「複数形を書け」などというのがそれである。flies と flys，孰れを誤りとするのか，

This hat won't do. Show me the other.

状況を知らせないで，どうして解答にあるように the other を another とせねば誤りを正したことにならないのか。陳列窓に2つ帽子があった場合でも誤りなのか。しかも「2つの名詞のうち任意の一方を one でさすと，残りの1つはかならず the other となる」と説明しておきながら。理屈を言えば次の3文

Do you think who he is?
Bring me a cup and *a* saucer
I read *two first* pages

も最初の文は「彼は誰だろうと考えたりすることがあるか」という意味であり，次の文は1組と考えないで別々に考えたものであり，2冊の本の第1頁を読み比較することも起りうる。the *long five* years—Erskine Caldwell : *The Mating of Marjorie* も for *three long* years—Robert Jackson : *Forgotten Moments* も存在する。前者は纏まった5年間を長いと感じた表現であり，後者は1年，1年を長いと感じた3年間である。一方の表現が絶対にないような，あるいはあり得ないような教え方をするのはどうであろう。そして意味も与えず状況も説明しないで，大体の見当をつけて訂正するだろうなどと考えて受験生に責任をとらすべきではない。

更にまた米語，口語に関係なく誤りと信じられているような表現もある。

My father is a scholar and *a* poet.

後の名詞に付く冠詞を誤りとするのがそれである。any other の次に来る名詞の数に関しても複数を誤りとする問題が出されている。another 即ち an other に比べて any other は，意味が強い。しかし次の如き表現

Why should his opinions be of value in *any other?*—*Politics vs Literature*（1分野だけの専門家である科学者の意見がどうして他のいかなる分野に於ても価値がありうるであろうか）

に対し，多くあることを示す必要のある時は any others の気持で複数にならざるを得ない。

any other *questions*—Thornton Wilder : *Our Town*
any other English *words*—Margaret Bryant : *A Functional English Grammar*
any other great *creators*—Marjorie Boulton : *The Anatomy of Prose*
any other *parts*—G. H. Vallins: *Good English*

文法の規則を教えるのは当然であり，相手に応じて教える範囲を狭めるのは良い。しかし変り行く言葉を基磐としてできた文法規則を絶対視して，それに少しでも外れるものを誤りと極め付ける硬直した思考態度では言語の，引いては人心の微妙な働きを見ることは困難であろう。

（A）

関係代名詞の正誤・選択問題にも同じような傾向が見られる。その原因は関係代名詞にとどまらず英文法全体に共通するものであるが，実状からかけはなれた，または曖昧なあるいは不完全な説明，実証的でない例文，無思慮な言葉の使用などにある。これらが文法理解の障碍となり，文法が敬遠される原因ともなっている。

先づ曖昧な説明について言えば，形容詞 every, all, any, some, no や最上級，序数，the only, the very, the same などが先行詞に付く場合などは関係代名詞には「that を用いる」と説明し，殆んどの文法書が that を用いた例のみ掲げ，who, whom, which が用いられることに言及したものは殆んどない。学習者を

誤りに導くものである。文語や口語の差も，格による使用上の多寡も，慣用も無視した説明である。これらを金科玉条として教え，それらに基づいて正誤・選択問題を出す。「that を用いる」とか稀にではあるが「使うのが原則である」としか説明しないのでは who, whom, which は用いてもよいのか用いられないのか。また目的格は「省略できる」という規則はこの「that を用いる」とした場合にはどうなるのか。「できる」というだけであって，この場合に限ってはするのかしないのか。実際は一体どうなのか，一切不明である。「原則である」と言っても実状を知ることはできない。このように極めて曖昧な言葉の使い方をしている場合が随所にある。例えば名詞を続けて使うときには「one, that, those 等を使う」として例をのせている。「使う」というのは使わねばならないのか，任意なのか，任意であればどういう場合に使うのか。次の2例は a loud *one*, *those* of a wounded deer としていないのは何故か，何故もっと明確な説明ができないのか。どうして実状を知らせることをしないのであろうか。同じ名詞が続けて使用されている文に出くわせばどう解釈すればよいのか。

His voice is a loud *voice*.— Alan Warner : *A Short Guide to English Style*
His eyes were like *the eyes* of a wounded deer.— Jack London : *Love of Life*

名詞は代名詞に比し意味が明確で強い。同一名詞を繰り返すのは主として強意のためであり，代名詞を用いるのは略した普通の言い方である。

文法は実際から遊離した学問ではない。英文を読み，英文を書くに当って役に立つのでなければ，いくら高等難解な論を弄んでも何の価値もない。文法を学ぶのは観念の遊戯をするためではない。常に実際を観察し，実際に使われる面から帰納することにこそ価値がある。実証的でなければ，実例を以てせねば，習得する意味はない。例文は生きているものでなければ時によっては有害無益なものとなる。しかしながら用いられている例の多くは説明に都合のよい作り上げられた例であり，時にはありそうもない例文まで用いている。いくら説明のためとは言え馬鹿々々しすぎる。

You see a house *whose roof is red.*

関係詞を使用するのは大体文語体である。ありそうもない例文を使うにしても実際的な日常的な文も併記しておくべきであろう。You see a house *with a red roof* と。

説明に都合のよい例ばかりを使用するために，実際に作品その他を読み始めると忽ち行きづまる場合が多い。実際に基づいて書かれた文法書でなければ，読み書きの手引きとなり役に立つものとはなりえない。前文の意味を受ける関係代名詞の which は必ず説明されているのに，口語で時々見かける Detached relative pronoun（分離関係代名詞）にしても大学生用の文法書にすら説明されていない。口語であるから，取り扱わないというのであれば「It is, there is, who is の後は関係代名詞は主語として立つときでも省略される」と口語的，日常普通の用法についての説明をのせているのと矛盾する。前文の意味は指示代名詞 that で受けることもあれば，関係代名詞 which で受けることもある。

But beautiful or not, she felt that by the sun she was appreciated. *Which* is the same. —D. H. Lawrence : *Sun*（しかし美しかろうとなかろうと，彼女は太陽に鑑賞せられたことを感じた。（美しかろうとなかろうと）そんなことは太陽に取っては同じことである）

To *which* Millerton, present and listening, retorted.—Dreiser : *Albertine*（それに対してミラートンは，居て聞いていたが，応酬した）

All the first grade's robins would look alike. *Which* was as it should be.—Frances Gray Patton : *Good Morning, Miss Dove*（1年生の描くロビンはすべて同じように見える。これは当然そうあるべきはずである）

その他，*That* is why の *That* と同じく前文の意味を受けた *Which* is why—John Osborne : *Look Back in Anger* や，独立した句 *That* is to say の *That* に代るものもある。

Clarity is so important in the language of science—*which* is to say, in the language of sanity—because clarity is a prerequisite to validity. —Wendell

Johnson : *Never the Same River*（明快さは科学の言語に於ては極めて重要である—即ち理性的である言語に於ては—何故ならば明快さは述べることが真実であるための必要条件であるからである）

次に関係代名詞に関する無思慮な言葉の使用について言えば,「省略」という言葉が頻繁に使用される。いとも簡単に「この後に目的格の関係代名詞が省略されている」と説明し，入試問題では「省略された関係代名詞を補え」と言う。どうして省略されたことが分るのか不思議である。存在していたもの，当然あるべきものを省いたのであれば「省略されている」とも「補え」とも言いうるであろう。たとえば all I know の場合関係代名詞は最初から念頭になかったのであり，もともとなかったものを示さなかったからといってそれを省略したとは言わない。補足しようと思えば補足しうるだけである。その補足にしてもある作家の作品中に目的格の関係代名詞を補い彼を納得させうるであろうか。書かれた文章には書いた人の好みも表れ，独得の味わいもある。勝手な補足はその特徴を殺すことになる。（まして文章の書き換えなど到底望みうることではない）。それを省略と説明する。では省略されているとして whom と that の，また which と that の孰れが省略されたのであろうか。何を省いたのか出題者も判断できない筈であるのに，省略されたものを補えと求めるのは乱暴であろう。歴史的に見ても省略されたものではないということは別にしても，軽々しく省略という言葉を口にするのは自ら考えることのないことを示している。ある語句と他の類似の語句とをすぐさま等号で結んで等しいとし，両者の差を考えないのと軌を一にする。関係代名詞が用いてなければそれでよいし，用いてあればそれでよいのであって，関係代名詞を用いた文が文として勝れているわけでも，完全な文であるわけでもない。文をあるがままに見て表現価値の相違を考え，現代英語の使用されている実状に留意すべきであろう。何の考えもなく使っている言葉は他にも多く,「特殊用法」などもその1例である。これについてはまた別の稿で述べる。

最後に不思議に思われることは文法の記載事項というか範囲が定まっていることである。どの文法書も一定の範囲から殆んど一歩も踏み出していない。上に述

べた Detached relative pronoun や拾遺 III で取り上げた a red and white rose と a red and a white rose の複数形なども文法書では取り扱わないことになっているかの如くである。I hear that 云々の場合この hear は have heard の代用であると殆んどすべての本で説明されている。誰が考えても真理は変らないという証拠であろうか。それならば文法書は1種類でよいであろう。拾遺Iで引用した Yes, I *hear* it, and *have heard* it. —Edgar Allan Poe : *The Fall of the House of Usher* の場合でも *hear* は have heard の代用であろうか。現在完了の形が盛んに使用されているのに何故代用させる必要があるのか。最初から完了形を使用すればよいであろう。また a kind of の次に来る名詞に関しての冠詞の有無は必ず問題にされているが，他の numerative (助数詞) の次に来る of の目的語に関しては何の言及もない。a kind of に関聯して少し説明してあれば学習者は大いに得るところがあるであろうに。即ち

a snatch of *song*, a stave of *song*, a ribbon of *road*,
a bite of *apple*, a perfect map of *cobweb*

などの類である。関係副詞にしても殊んどすべての本が the time when, the place where としか取り扱わない。(中にはひどいものになると the way how を何の説明も加えないでのせているものすらある)

no *occasion when*—Poe : *William Wilson*
on three *occasions when*— Williams : *Hard Candy*
occasions when — Vallins : *Better English*
the occasion on which — Warner : *A Short Guide to English Style*
A *case where* —Vallins : *Better English*
many *cases in which*—Randolph Quirk : *A University Grammar of English*
in all cases except *that in which* — Quirk : ibid.
In *circumstances where* — Quirk : ibid.
instances, where—London : *The Call of the Wild*

実例を集め考え，実証的に編まれることの少いと思われる現代の日本の英文法書は説明が曖昧であり，実状の解説が殆んどなされず，為に実用的利用価値が低

い場合が極めて多い。

一般的に言って現代英語の場合，目的格の関係代名詞は使用されることは極めて少い。このことは先に述べた，先行詞に意味の強い語が付く時「用いられる」と説明された that についても同様である。目的格の関係代名詞は作家によって多少の相違は見られるにしても現代の英語の傾向としては90%～95%は用いられていない。更にその残りの使用された10%～5%についても，that と並んで whom も，そして少数ではあるが which も使用されている。例えば all, only, 最上級の形容詞が先行詞に付く約200例中簡単に言えば，(1)人間の場合主格は動物の that 1例をのぞいてすべて who であり，目的格の場合も使用されているのはすべて whom で人間には who, whom を使用する現代英語の傾向を示している。(2)物に関しては主格は which を用いているのは以下の引用の最後に示した1例のみであり，他はすべて that であり，目的格は all の場合 that が8%程度使用されているのみで，only と最上級には使用されていない。また目的格の which は三者にすべて使用されていない。先行詞に対し意味の強い語が用いられている時，理論的な，客観性を有する which を用いることは，先行詞に意味の強い語を用いた感情的意図と矛盾するからであろう。

尚 all I know と all that I know との差について大体を言えば，前者は all と I know の結び付き，密着性が強い。ひと纏めに簡単に考えた口語的表現であり，後者は分析的であり，それだけ正確さが増し文章で使われることの多い表現であると言える。

all who knew him—John Marquand : *The Late George Apley*
all the patients *who* exhibit such and such symptoms—Johnson : *Never the Same River*
all *that* I beheld—poe : *A Descent into the Maelstrom*

Clem was *the only* one *who* might try to stop Arch.—Caldwell : *Kneel to the Rising Sun*
I'm *the only* one *who* can read them. —John wain : *Nuncle*

Uncle Hal was *the only* one *whom* he would trust. —Clarence Day : *Life with Father*

I serve *the best* drinks I know how to serve. —Irwin Shaw : *The Monument* (出し方を知っている最高の飲み物を私は出すんです)
the prettiest girl I'd ever seen — Wilder : *Our Town*
the warmest, pleasantest odors I know—John Steinbeck : *The Long Valley*
the greatest men *whom* I have ever known —Marquand : *The Late George Apley*

It did *the worst* thing *which* could befall a soldier in combat. —Norman Mailer : *The Dead Gook* (その手紙は戦闘中の兵士に降りかかり得ないほどの最も悪い影響を与えた)

ある問題集で「このような（専ら that が用いられる）場合には物には which, 人には who が用いられるという例外もあるので注意してほしい」と言う。何故例外なのか，どういう注意をせよというのか，それらは誤用であるから惑わされるなと言うつもりであろうか。尚 which については same に関連しての例を p. 71 に引用した。

At last he found the very man (who, whom, that, as) he wanted.
You are the best friend (who, whom, that) I have.
'Faust' is the only opera (that, which) I like.

これらは選択問題として出題されたものであるが，3問とも関係代名詞を使用しない方が現代英語の傾向に最も一致する。選択肢には実状にそって「不使用」も入れてもよいであろう。

更に次は訂正問題として出題されたものである。何を基準として誤りと断定するのか出題者に是非聞きたいものである。

He is the only one of the students who speaks English very well.
He is the kindest man who ever lived.

(B)

the same...that : the same...as

目的格の時は *that* と *as* は共に用いなければならないのか，共に省きうるのか，それとも孰れか一方のみ省きうるのか。この疑問に対する説明はどの文法書にも一切されていない。特に実証的な文法書でなければ，英米人の用いる文法書を英語を母国語としない国民に押し付けても同じ効果を収めうるものではない。外国人の場合と違って，英米人に取って文法書は彼らが本能的，直感的に理解している事柄を確認させる程度のものである。それを弁えず，ただ英米人用の文法書の規則を羅列し，それら規則の説明に最も都合の良い，しかも時には極めて非現実的な，例を挙げてこと足れりとする。上述の問題に関して言えば省きうるのは本来の関係代名詞の *that* であって，quasi-relative pronoun の *as* は省けない。そして *that* の出没は他の目的格の場合と同様である。

William : It's *the same* paper the tragedy of Vortigern was written on.—Arthur Miller : *William Ireland's Confession*（それはヴォーティガンの悲劇が書かれた同じ紙ですよ）

Shakespeare の Ann Hathaway 宛の love letter と称して William が書くのに用いた紙は，悲劇の書かれた紙そのものの上に更に書かれたものではなく，白紙の部分が用いられたことは常識で判断できる。

Simmon Stimson : We'll do *the same* music we did for Jane Trowbridge's last month.—Wilder : *Our Town*（先月ジェーン・トロウブリッジの結婚式の時弾いたのと同じ音楽を弾きましょう）
He governed her with *the same* gentle inflexibility he used on horses. —Steinbeck : *The Pastures of Heaven*（彼は馬に対して用いたのと同じ優しい不屈さで妻を支配した）
with *the same* look in his eyes he had had that afternoon—Caldwell : *Kneel to the Rising Sun*（その日の午後示したのと同じ目つきをして）
He made camp on a rocky ledge in *the same* fashion he had the night before. —London : *Love of Life*（前の晩と同じやり方で岩棚の上で野営をした）
It's on *the same* road we lived on. —Wilder : *Our Town*

最初の例で触れたように，これらの例から *that* の場合は同一物，*as* の場合は

同種類と説明して

This is *the same* watch *that* I lost yesterday
This is *the same* watch *as* I lost yesterday

とまるで何かの1つ覚えのような例を挙げて説明して来たことが学習者に誤解を与える虞がなかったかどうか明白であろう。上に引用した最後の1例を除いてすべて同一物そのものではない。*that* を用いるか *as* を用いるかは同一性の強弱に関する事柄である。即ち同一性を強く感ずれば前者が，弱く感ずれば後者が用いられる。従って同一性の感じが減ずるに従って前者は後者に近付き，孰れを用いることも可能な場合も生じてくる。感じ方の問題である。例えば上の第4例はこれも日常語として関係代名詞は用いられていないが，見方をかえて種類というのであれば as が必要となる。次の2例についても同じことが言える。

I thought they were arguing about *the same* thing *as* they always did. —Caldwell : *The Day We Rang the Bell for Preacher Hawshaw*（僕は彼等がいつも議論しているようなことを議論しているのだと思った）
the same place in their community *as* the Jews in Nazi Germany—George Orwell : *Politics vs Literature*

次に目的格 *that* の用いられている例を挙げる。

He said he had supposed that Mother would have *the same* feelings *that* he had about this. —Day : *Life with Father*（父はこのことについては彼が持っているのと同じ感情を母が持っているだろうと想像していたと言った）
I know that you must love *the same* things in George *that* I love. —Marquand : *The Late George Apley*（私はあなたが，ジョージの内にある，私が愛しているのと同じものを愛するに違いないということを知っています）

最後の例の *that* はもし無ければ先行詞を George と間違い易いおそれがある。しかし in George を最初の love の次に移せば内容にそぐわない formal な文となる。主格の例を挙げる。

that's *the same* thing *that*'ll keep my head up—Miller : *The Pussycat and the*

Expert Plumber（それが私が昂然としておられるのと同じ事柄だ）
by *the same* temptations *that* assail you—Anderson : *Winesburg, Ohio*（あなたを襲うのと同じ誘惑によって）

ある英文法辞典に「*which* は用いられない。もし用いれば awkward になる」と説く。*which* を用いれば既に述べたように客観性が強まり堅い感じを与えはするが，必ずしも awkward になるわけではなく用い方如何であろう。但し和らげようと思えば *that* が用いられる。

the same enjoyment *which* is experienced by the writer and the reader of a sonnet—Struther : *Mrs. Miniver*（14行詩の作者と読者の味わうあの同じよろこび）
by *the same* act *which* his fidelity to our pledge now entails upon me—Ambrose Bierce : *In the Midst of Life*（我々２人の間の誓約を彼が忠実に果した為に今や私に課せられている同じ行為によって）

ある文法書では同一でも *as* を用いることがあるとして次の例をのせている。(出典不明)

I bought it at *the same* shop *as* you bought yours.

同一を表す場合の節に動詞を省こうと思えば次のように *that* は *as* に変る。

his insistence that women should receive *the same* education *as* men — Orwell : *Politics vs Literature*（女性も男性と同じような教育を受けるべきだという彼の主張）

従って *as* には同一，同種の両用があるが，上の文には動詞は省略されていない。また *that* であれば文尾に at が必要となる。どちらを使用しても完全なものとはなり得ない。従ってこれは *as* を where に変るべき性質のものであり，「同一でも *as* を用いることがある」として引用すべき種類のものではない。また同書には更に次の２例をのせている。

He would perhaps after tonight never be *the same* man *as* he was before.
He gave *the same* answer *as* he had given before.

これらは *same* をどう感じるかの問題である。p. 73 にも引用したように人も物

も時々刻々に変化し完全に同一状態ではあり得ないと考えれば *as* で少しも差支えない。また同一性を強調すれば *that* であるが，それほど意識していない時は *that* に比べ *as* の方が loose に使われる率は高い。更に日常語であればこれらの *as* は使用されない方が普通であろう。

またある文法書では抽象概念は同一，同種の区別がないから *that, as* どちらでもよいという。(出典不明)

I gave *the same* price *that* (*as*) you gave.

しかし同一で *as* を使うのは動詞を省略した時であり，*that* の場合は *that* you では文にならず，*that* you gave または *that* you did であり，*as* を用いて同一の如く書くのはこれまた loose であると言えるし，用いられること自体少い。

次の文は誤文訂正の問題としてある大学が出題し，いくつかの問題集に取り入れられている。

This is the same man whom I saw in the train.

Improve せよという設問なら whom を取り去ればよい。formal な感じを与える関係代名詞をこのような内容の文で使用することは不自然であり，日常語では略するのが普通である。言葉は言う必要のない時は言わない。必要のない関係代名詞は使わないのが原則である。ともあれこの文には訂正すべき誤りはない。正しい文は訂正のしようがない。しかしこれを誤りなしと答えれば採点はどうなるかは明白である。入試英語とは一体何なのか。英米人に変な英語が日本で蔓延っていると言われる所以である。

that, as と並んで前置詞 with が用いられる場合がある。

Some of us even have the courage to sit on the same level and at *the same* seminar table *with* our students and listen to what they have to say. —Roger W. Holmes : *What Every Freshman Should Know* (我々の中のある者は我々の学生と同じ高さの所に坐り，同じ演習のテーブルに坐り，彼らが言おうと思っていることに耳を傾ける勇気を持ちさえした)

即ち関係代名詞を使用するとすれば，the same seminar table *that* our students sit at, and to listen... あるいは at which our students... のように複雑になるところを，関係代名詞を使用しなくても，簡単に prepositional phrase で表しうる。

最後にもう１例関係代名詞の用いられていない例を長くはなるが引用する。

> Now, looking at the apple this week, we remark that it is different, but that nevertheless it is *the "same"* apple we saw last week. It is the same but it is different! Here, then, is a very curious problem. How can two things be the same and yet different?
>
> Strangely enough, two things that are different may also be the same, and two things that are the same may also be different. Whether they will be the same or different—so far as we individually are concerned—depends on the way we are set to react to them. —Johnson : *Never the Same River*（さて今週のリンゴを見て，我々はそれが違っている，しかしそれにも拘らずそれは我々が先週見たのと同じリンゴであると言う。それは同じではあるが違っている。そうであるならここに極めて奇妙な問題がある。どうして２つのものが同じでしかも違っていられるのか。
>
> 全く奇妙なことに，違っている２つのものはまた同じであるかも知れないし，同じである２つのものはまた違っているかも知れない。それらが同じであるか違っているかは——我々に個人的に関する限り——我々がそれらに対し反応する仕方によっているのである）

そして彼は更に次のように言う。

> No two things turn out to be the same and no one thing stays the same.（どんな２つのものも同じことにはならないし，どんな１つのものも同じままではいない）

—— 文学部教授 ——